

おやすみなさい

詩：石垣りん

曲：高橋悠治

piano

おやすみなさい よる がみちて きま

した しおの ように ひとりひとりは

そら にうかん だ 地球のうえの ちいさな しまです

あさも ひるも よるも まいにち なんととおくからわたした

ちをおとすれ またとお—ざかっていくのでしょう いままで

すがたをあらわしていたもの—がすっぽりうみに かく れてしまうこともあるよう

に ひとは ふとんにはいり—ねむ ります ぬれてしずんで

われを わすれて わたしたち うまれた

その日からねむることをけいこしてきました

それでもじょうずにはねむれないことがあります今夜はいか

—がですか ふとんからやっとかおだけだしてそれさえ

あたまからかぶったりしてひとはねむりますよいゆめを

みましよう 財産も 地——位も 衣装ももちこめ

ない ふか いやみ——の なかで みんなどんなにやさしくあつ

く はげしくいきて——きたことでしょう はだかのしまに ふ

かい よるがおとずれて います 眼をつ むりましよう あしたが

くるまで おやすみなさい

「おやすみなさい」

水牛楽団の頃、詩と音楽の集いで石垣りんがこの詩を読んだ。
はっきり区切られた声がふつうのことばに歴史をきざみながら。
それに作曲すると言って原稿をもらったが、
歌にならないで25年経ち、詩人はもういない。
寄せては返す波がいつもすこしずつちがうように、
そのあいまにきこえる歌声も、いつか位置を変えて行く。
三絃弾きうたいの伝統のなかの音でありながら、
そこから遠く離れた音楽の可能性がある。

高橋悠治

東海テレビ クロージング 石垣りん

おやすみなさい

石垣りん

おやすみなさい。

夜が満ちて来ました

潮のように、

ひとりひとり空に浮かんだ

地球の上の小さな島です。

朝も 昼も 夜も

毎日

何と遠くから私たちを訪れ

また遠ざかって行くのでしよう。

いままで姿をあらわしていたものが

すっぱり海にかくれてしまうこともあるように、

人は布団に入り

眠ります。

濡れて 沈んで、我を忘れて、

私たちが 生まれたその日から

眠ることをけいこして来ました。

それでも上手には眠れないことがあります。

今夜はいかがですか？

布団から やつと顔だけ出して

それさえ 頭からかぶつたりして

人は 眠ります。

良い夢を見ましよう。

財産も地位も衣装も 持ち込めない

深い闇の中で

みんなどんなに優しく、熱く、激しく

生きて来たことでしょうか。

裸の島に 深い夜が訪れています。

目をつむりましよう。

明日がくるまで。

おやすみなさい。